

光コミュニケーションを実現する 情報システムの導入と今後の展開

東日本電信電話株式会社
技術部 情報システム部門
担当部長 曾根原 利法



光ブロードバンドの映像コミュニケーションサービスは、光ならではの高品質・高付加価値コミュニケーションを実現するサービスとして今後の普及が期待されている。特に企業においては、コミュニケーションの効率化・活性化による業務効率向上など直接的な効果が期待できるだけでなく、遠隔地との円滑な意思疎通が可能になることでローカルオフィスやバーチャル会議室の導入を促進し、ワークスタイルの変革によるコスト削減や収益向上に結びつく可能性を秘めている。

本稿では、企業向けの光コミュニケーションシステムの可能性について述べたいと思う。

1. 情報システムと光コミュニケーションの接点とは

企業にとって情報システムは、経営戦略実現の手段であり、事業環境の変化に柔軟に対応していくための業務プロセス改革を支えるものである。そのため、経営や事業に密接に関連する基幹系情報システムでは、システムのWeb化やパッケージソ

フトの導入など最新技術の導入が積極的に進められ、企業内の通信ネットワークには十分な帯域・品質を確保するために光などの広帯域回線が使われている。

一方、日々のミーティングや業務連絡等、基幹業務以外で利用されるメール・電話等のOA系情報システムは、多くの社員が利用するにもかかわらず、その効率化・高度化の必要性に対する経営者の認識は必ずしも高くない。コスト抑制のために利便性を犠牲にして、旧来のシステムと、十分とは言い難い帯域・品質の通信ネットワークを使い続ける場合も多い。

ところが、最近、社内電話の置き換えを目的としたVoIPサービス導入などを契機に、OA系情報システムに対しても機能高度化の機運が高まりつつあるように思われる。ブロードバンド通信サービスの普及とともに、その広帯域な通信環境を活用して業務効率化や収益向上などの付加価値を生むVoIPやコラボレーションシステム等のソリューションが登場してきたことにより、OA系情報システムについても新しいサービス・

技術を積極的に社内に導入できる環境が整ってきたということだろう。

光回線による音声、データ、映像コミュニケーションを可能にする光コミュニケーションシステムは、従来の音声通信による会話や会議を効率化できるだけでなく、文章作成ソフトウェアやグループウェア等の業務アプリケーションとの機能連携により、業務効率化のツールとしても活用できるため、OA系情報システム高度化のソリューションとして付加価値が訴求できる。

弊社では、光コミュニケーションシステムによる社内業務改革及び将来のサービス化を視野に入れ、NTT持株研究所の開発プロダクトをベースにした映像コラボレーションシステムの社内導入を進めている。現在、約1,000台の端末を導入して社内業務で利用しており、業務への活用効果の確認と技術蓄積を進めている。

2. 映像コラボレーションシステムはキラーアプリケーションになり得るか？

映像コラボレーションシステムを

一言で言うと、『遠隔地との共同作業や情報共有など、多人数の連携による価値創造を支援する映像コミュニケーションシステム』であり、SOHO、遠隔医療、遠隔教育分野などでの利用が想定される。電話（音声通信）や、TV会議（音声＋映像通信）などは、情報を“伝える”だけで価値創造ができないという点が大きく違うところである。

映像コラボレーションシステムは、各個人の自席のパソコンにカメラ、ヘッドセットを接続して利用することができ、利用者の映像表示、資料の表示・書き込み、インスタントメッセージ（チャット）等の機能を基本機能として具備している。多地点会議、遠隔セミナー、開発・設計打ち合わせ等で映像によるストレスを感じさせないコミュニケーションができるため、次のようなメリットがある。まず、相手の顔を見ながら議論できるため会議の円滑進行や時間短縮が期待できる。資料共有やインスタントメッセージなどを活用することで正確な意思疎通ができ、共同作業の効率化や認識間違いの防止ができる。自席から会議に参加できるため、会議開催における時間・場所の制約が少なくなり、出張費の削減とタイムリーな会議開催による意思決定の迅速化が期待できる。

以上のようなメリットがあるが、企業への導入例はまだ少ないのが現状である。市場がまだ未成熟であることが大きな理由であると考えられるが、システム導入効果が直接的・定量的な形で現われにくいいため、企

業には導入が難しいという側面も影響しているのかもしれない。

では、今後の普及拡大に向けて映像コラボレーションシステムに何が求められているのであろうか。実際に映像コラボレーションシステムを導入しているユーザーの声を聞くと操作性や機能への要望もさることながら、音声・映像の品質向上やNWへの接続性を求める声が多い。ADSL等のブロードバンド通信サービスでは多少品質が悪くても安価なサービスを求める傾向が見受けられるが、映像コラボレーションシステムでは音声・映像の品質確保はサービスの基本であるため、高品質なサービスを利用するための広帯域・高品質な通信環境が必要とされているということだろう。そういった意味でも、映像コラボレーションシステムは光サービスのキラーアプリケーションになり得ると言えるだろう。

現在、映像コラボレーションシステムは、ADSLやISDN回線を使用するものも含めると20社以上が販売・提供しており、各社の映像コラボレーション市場拡大にける期待の大きさが感じられる。

3.光コミュニケーションの 拡大に向けて

光サービスを拡大するには、光を利用するアプリケーションの普及が不可欠である。光サービスに関する議論では、しばしばキラーアプリケーションの不在が取り沙汰されるが、キラーアプリケーションは突然

誕生するわけではない。光サービスがブロードバンドサービスの本命であることは誰もが認めるところであるが、光サービスを前提としたアプリケーションはそのビジネスモデルも含め、まだ試行錯誤の段階である。弊社は通信事業者として光ブロードバンド回線の普及に尽力しているところであるが、その活用方法については、利用者であるお客様にも協力していただき、試行錯誤しながらより良いものを作り出していく必要がある。

定額制通信サービスなど安価で利用しやすい通信サービスを提供することは通信事業者の責務であるが、通信サービスの新しい利用シーンも併せて提案し、世の中に光コミュニケーションの世界を広げていくことも通信事業者としての責務では無いかと考える。

お客様に対して、便利なコミュニケーション環境をアクセス回線からアプリケーションまで総合的に提供することができれば、光の世界も爆発的に普及を見るだろう。映像コラボレーションシステムがその一翼を担うことを期待している。

お問い合わせ先

東日本電信電話株式会社
技術部 情報システム部門
TEL.03-5359-2732
FAX.03-5359-1192
E-mail:t.sonehara@east.ntt.co.jp